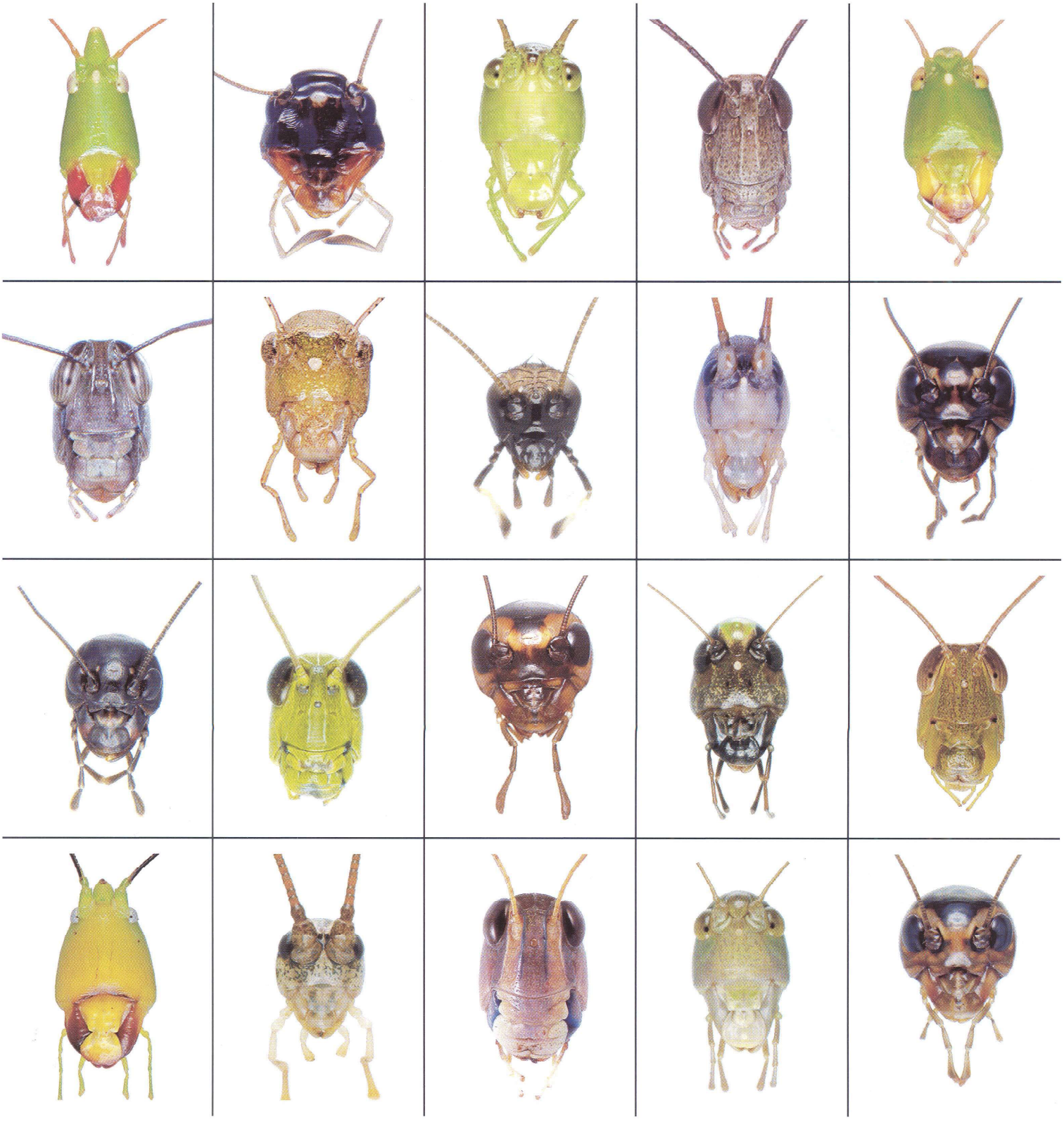
小金原市昆虫館だより

(通巻67号)Vol.17. No.3

GONTA

この顔(かお)、だぁ～れだ?!



第18回特別展「バッタ・コオロギ・キリギリス」特集号

(答えは裏表紙に)

ごあいさつ

今年も、橿原市昆虫館周辺の草むらでは、キリギリスが元気よく鳴く季節となりました。

さて、橿原市昆虫館では開館以来、毎年特別展を実施して参りましたが、今夏はバッタの仲間を主役に据え、第18回特別展「バッタ・コオロギ・キリギリス展」を開催します。しかも今回は、「日本直翅類学会」という日本を代表する専門家との共催です。同学会は、日本直翅類研究グループという名で1978年に発足し、来年は結成30周年を迎えられます。さらに、同学会が昨年発行された「バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑」の祝賀も兼ね、今回の特別展を開催する運びとなりました。

特別展を一人でも多くの方にご覧頂き、素晴らしき昆虫の世界への一歩となりますよう、また、更なる研究の進歩を祈念してやみません。

今回の特別展に際し、たくさんの方々にご協力を賜りました。末筆ながら、厚く御礼申し上げます。

2007年8月1日　橿原市昆虫館長　西川明秀

日本人の鳴く虫に対する興味や関心は高く、長い歴史を持っています。鳴く虫文化は、世界でも我が国と中国だけに特異的に発展した伝統文化といえます。ところが、スズムシなどコオロギ類の一部に限って鑑賞や飼育に深い関心や技術を高めてきた一方で、昆虫全般と同様に直翅類の種の多様性や生態などに対する関心ははとんどなく、長い間分類学的研究は発展することはありませんでした。ようやく明治以後の昆虫分類学の発展に伴い、松村松年、素木得一、大町文衛、古川晴男、野澤登、山崎柄根等の碩学によって研究が進展しましたが、それでも蝶や甲虫、トンボなどに比べて昆虫愛好者の関心は薄く、底辺の広がりを見ることなく、他の分類群に比べて長い低迷が続いてきました。

1978年4月、日本直翅類学会の前身、日本直翅類研究グループが発足しました。直翅類はもとより昆虫すらあまり知らないアマチュアにより、細々と発足しました。連絡誌「ばったりぎす」の名称が示すように、いつ“ばったり”倒れてしまうかわからない不安で心許ない出発でした。それから29年しぶとく生き残り、多くの分類学的成果を上げるまでになり、やっと先進諸国と肩を並べる水準に到達したと思えるようになりました。活動当初、日本に分布する種類は200種未満しか数えることが出来ませんでしたが、今では500種近くを分類しています。

この間、2人の指導者を失いました。音響生物学の草分けで、コオロギ類の生態や鳴き声に詳しい松浦一郎さんと、大阪市立自然史博物館の学芸員である日浦勇さんです。松浦さんには鳴く虫の世界の楽しさを、日浦さんには発想や創造の喜びと、研究の仕方や直翅類の分類学を教わりました。先学の暖かい導きがあってこそ、着実に研究を進めることが出来たものと深く感謝しています。

図鑑を作ることは、松浦さんの生前からの大きな目標でした。蝶類や甲虫類、トンボなどの豪華な図鑑に接するたびに、会員の中に沸々とその思いが燃え始めていました。具体的に動き始めたのは1994年9月、それから12年の歳月を数え、昨年9月、ようやく北海道大学出版会から「バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑」が刊行されました。

本展覧会は、橿原市昆虫館のご厚意により、大図鑑完成を祝って企画したものです。奈良県に生息する直翅類を中心として多くの昆虫たちを紹介し、私たちと直翅類との関係について関心を持って頂きたいと思っております。最後に本展の開催にあたり、ご協力ご尽力をいただきました橿原市昆虫館、標本の貸し出しや展示制作にご協力して頂きました大阪市立自然史博物館をはじめ、北海道大学出版会、ＮＰＯ法人やまと自然と虫の会、橿原昆虫館友の会、本学会会員の皆様に御礼申し上げます。

2007年8月　日本直翅類学会長　加納康嗣

バッタ・コオロギ・キリギリスとは？

はじめに

今回の特別展の主役「バッタ目（直翅目）」は、有名な鳴く虫を多数含み、古今から日本人に親しまれていましたが、案外その実態は一般には知られていませんでした。例えば、かなり多くのバッタ等が鳴くことをご存じない方は多いのではないでしょうか。特別展では、そういった知られざる鳴く虫の生態や虫たちの演奏もご紹介します。

また、鳴く虫の文化史も扱っています。加納康嗣氏の所有する多数のコレクションから、特に世界中の鳴く虫の玩具や虫かご等を集めました。

世界の直翅類

直翅類というのは、バッタ目やナナフシ目、カマキリ目、ゴキブリ目など、原始的で不完全な変態をする昆虫の仲間です。

所変われば虫も変わります。海外には様々な変わった直翅類がいるのです。特に熱帯地方では、ナナフシやカマキリ、ゴキブリなどに奇抜な形態や生態の昆虫が多数生息します。変わったバッタも含め、その絢爛・珍妙さは驚くばかりです。熱帯のゴキブリたちの豪華さは一見の価値がありますし、もちろんバッタやコオロギ、キリギリスにも変わったものがたくさんあります。

日本のバッタ・コオロギ・キリギリス

大図鑑に掲載されている日本のバッタ目はおよそ500種に少し足らない程度。カマドウマやササキリモドキなどにも多数の種類があります。

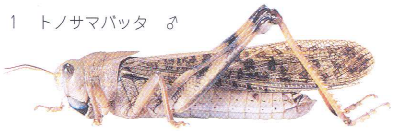
バッタ目は海岸、平地の空き地や河原、田畑から洞穴や高山までさまざまな環境に棲息します。ですから虫を観察したり採集したりするには、虫が生息するあらゆる環境に行かなければなりません。さすがに水中にはほとんどいないのですが、それでも水辺や主に北日本の湿地には変わった種が多数生息します。（市川顕彦／日本直翅類学会）

ばった　いろいろ

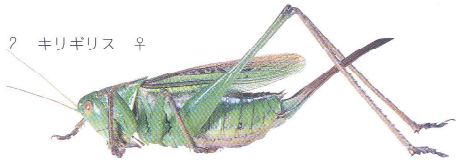
バッタから連想するのは、トノサマバッタ。コオロギから連想するのは、エンマコオロギ。キリギリスから連想するのは、キリギリス。では、コロギスから連想するのは、コオロギとキリギリス？…。クロギリスから連想するのは、黒いキリギリス？…。カマドウマから連想するのは、釜戸の馬？…。これ全部、直翅目（ちょくしもく）と呼ばれている分類群にあるバッタの仲間です。それでは、直翅目が棲んでいる環境を連想してみましょう。皆さんはきっと、野原や河原の風景をイメージされると思います。確かに、草の繁茂する環境には多くの種類の直翅目が棲んでいます。でも、波打ち際の岩礁や砂浜、林や森の樹上や林床、朽木の中や洞窟で生活している直翅目もいます。高い山の上にも棲み、地面に穴を掘って棲むもの、はてはアリの巣の中で生活しているものまでと千差万別。地上のあらゆる環境に棲んでいると言っても過言ではないのです。

かたち　いろいろ

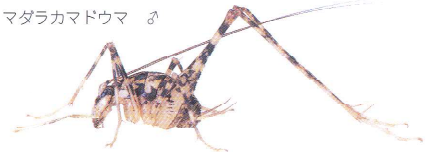
1　トノサマバッタ　♂



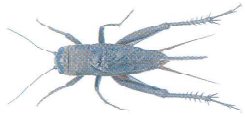
2　キリギリス　♀



3　マダラカマドウマ　♂



4　エンマコオロギ　♂



5　ハラヒシバッタ　♂

写真１　バッタ型
　最もバッタらしい、バッタの代表。
写真２　キリギリス型
　草むらに棲む代表。昼間でもよく鳴くタイプが多い。写真はメス、お尻から伸びている刀のようなものは、産卵管。土に刺し込み卵を産みます。
写真３　カマドウマ型
　体よりも脚のほうが長い。暗くて湿った所が大好きで、洞窟などに棲む代表。
写真４　コオロギ型
　体はひらたく、翅を立てて鳴くグループ。
写真５　ヒシバッタ型
　背中のほうから見ると、ひし形をしているのがわかる。

飛ぶバッタの代表は、飛蝗（ひこう）と呼ばれ農作物にも被害を与えるトノサマバッタ。昆虫館近くの藤原京跡で毎年開催される「遠くに飛ばそうバッタ君」でも、遠くまで飛んでいくのはトノサマバッタです。

飛ぶ翅を持たないグループで、跳躍力のすごいバッタはカマドウマの仲間です。古い民家には、ベンジョコオロギと呼ばれているマダラカマドウマが棲んでいます。捕まえて手のひらにのせると、ずっしりくる重さですが、一回の跳躍で２ｍ以上はねたのを見たことがあります。　（伊藤ふくお／日本直翅類学会）

バッタ・コオロギ・キリギリスとは？

はじめに

今回の特別展の主役「バッタ目（直翅目）」は、有名な鳴く虫を多数含み、古今から日本人に親しまれていましたが、案外その実態は一般には知られていませんでした。例えば、かなり多くのバッタ等が鳴くことをご存じない方は多いのではないでしょうか。特別展では、そういった知られざる鳴く虫の生態や虫たちの演奏もご紹介します。

また、鳴く虫の文化史も扱っています。加納康嗣氏の所有する多数のコレクションから、特に世界中の鳴く虫の玩具や虫かご等を集めました。

世界の直翅類

直翅類というのは、バッタ目やナナフシ目、カマキリ目、ゴキブリ目など、原始的で不完全な変態をする昆虫の仲間です。

所変われば虫も変わります。海外には様々な変わった直翅類がいるのです。特に熱帯地方では、ナナフシやカマキリ、ゴキブリなどに奇抜な形態や生態の昆虫が多数生息します。変わったバッタも含め、その絢爛・珍妙さは驚くばかりです。熱帯のゴキブリたちの豪華さは一見の価値がありますし、もちろんバッタやコオロギ、キリギリスにも変わったものがたくさんあります。

日本のバッタ・コオロギ・キリギリス

大図鑑に掲載されている日本のバッタ目はおよそ500種に少し足らない程度。カマドウマやササキリモドキなどにも多数の種類があります。

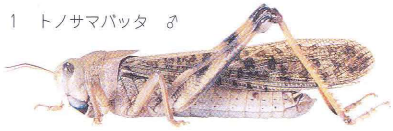
バッタ目は海岸、平地の空き地や河原、田畑から洞穴や高山までさまざまな環境に棲息します。ですから虫を観察したり採集したりするには、虫が生息するあらゆる環境に行かなければなりません。さすがに水中にはほとんどいないのですが、それでも水辺や主に北日本の湿地には変わった種が多数生息します。（市川顕彦／日本直翅類学会）

ばった　いろいろ

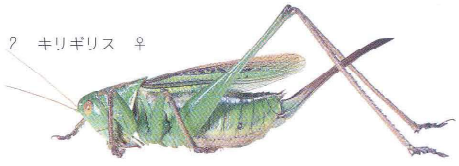
バッタから連想するのは、トノサマバッタ。コオロギから連想するのは、エンマコオロギ。キリギリスから連想するのは、キリギリス。では、コロギスから連想するのは、コオロギとキリギリス？…。クロギリスから連想するのは、黒いキリギリス？…。カマドウマから連想するのは、釜戸の馬？…。これ全部、直翅目（ちょくしもく）と呼ばれている分類群にあるバッタの仲間です。それでは、直翅目が棲んでいる環境を連想してみましょう。皆さんはきっと、野原や河原の風景をイメージされると思います。確かに、草の繁茂する環境には多くの種類の直翅目が棲んでいます。でも、波打ち際の岩礁や砂浜、林や森の樹上や林床、朽木の中や洞窟で生活している直翅目もいます。高い山の上にも棲み、地面に穴を掘って棲むもの、はてはアリの巣の中で生活しているものまでと千差万別。地上のあらゆる環境に棲んでいると言っても過言ではないのです。

かたち　いろいろ

1　トノサマバッタ　♂



2　キリギリス　♀



3　マダラカマドウマ　♂

4　エンマコオロギ　♂

5　ハラヒシバッタ　♂

写真１　バッタ型
　最もバッタらしい、バッタの代表。

写真２　キリギリス型
　草むらに棲む代表。昼間でもよく鳴くタイプが多い。写真はメス、お尻から伸びている刀のようなものは、産卵管。土に刺し込み卵を産みます。

写真３　カマドウマ型
　体よりも脚のほうが長い。暗くて湿った所が大好きで、洞窟などに棲む代表。

写真４　コオロギ型
　体はひらたく、翅を立てて鳴くグループ。

写真５　ヒシバッタ型
　背中のほうから見ると、ひし形をしているのがわかる。

飛ぶバッタの代表は、飛蝗（ひこう）と呼ばれ農作物にも被害を与えるトノサマバッタ。昆虫館近くの藤原京跡で毎年開催される「遠くに飛ばそうバッタ君」でも、遠くまで飛んでいくのはトノサマバッタです。

飛ぶ翅を持たないグループで、跳躍力のすごいバッタはカマドウマの仲間です。古い民家には、ベンジョコオロギと呼ばれているマダラカマドウマが棲んでいます。捕まえて手のひらにのせると、ずっしりくる重さですが、一回の跳躍で２ｍ以上はねたのを見たことがあります。　（伊藤ふくお／日本直翅類学会）

ゴードン・スミスさんの買った虫売り屋台

ゴードン・スミス（1858-1918）は明治31年（1898）、長旅の途中初めて日本にやってきた。彼は大英博物館の依頼を受け、東アジアの生物標本を蒐集することも目的にしていた。裕福なこのイギリス人は、現地妻と暮らし、日本文化を堪能することになる。スミスは民俗資料として第1級品と言える貴重な日記を残している〔ゴードン・スミスのニッポン仰天日記（小学館1993）〕。その日記から紹介しよう。

明治33年（1900）8月、愛妾クニコと神戸に暮らしていたスミスは、腫れ物に苦しんで、看護婦としてタケノウチ・ツルを雇う。彼女は鳴く虫に興味があって殆どの鳴き声をまねることが出来、蝶を見て喜んでいる賢い武家の娘である。看護婦の女性すら鳴く虫に造詣が深いことが伺えて面白い。

8月27日夜には近所の門前市に出かけている。「私が一番興味を持ったのは、大盛況の歌う昆虫スズムシの屋台だった。また、クツワムシの鳴き声は、ほかのすべての虫たちや屋台をかこんだ人々の声をもかき消すほどだった。私は即座に屋台のオーナーに掛け合い、翌日、売り物全部を自宅に持ってくるように言った。」

「8月28日火曜日　昆虫売りのK・ナカシマが午前10時に家にやってきたが、屋台毎運んできたので非常に面白かった。屋台の一番下は戸棚になっていて、昆虫がそれぞれ見えない容器に入っているが、うるさいクツワムシの籠だけはいちばん上に置かれて、そとから見えるようになっている。戸棚の上には予備の籠や修理道具などを入れるところがあり、その上に値段や大きさがまちまちのさまざまな籠が置いてある。さらにその上には、5種類の主な昆虫を示す絵文字が書かれた白いパネルがあって、その後ろにはランプがある。屋台は黒と白の四角い紙でできている。

籠の値段はかなりまちまちで、クサヒバリなどほんとうに小さな昆虫の籠の制作には、とても細かな職人芸が要求されるため、値段は上がる。最も一般的な角形のもので11円50銭、それより大きなスズムシの籠だと、同じ型でも70セントくらいだろう。

私はマツムシ、クツワムシ、クサヒバリ、エンマコオロギ、キンヒバリ、キリギリス、そしてモニンとよばれる剣状の尾をした緑色のバッタを買った。あとで気づいたのだが、この虫は午後9時から10時の間、命の歌か愛の歌か、とても静かな悲しげな歌を唄った。私のどの蔵書にも、この虫のムの字も載っていない。実際、私はこの分野について書かれた英語の本を知らない。ラフカディオ・ハーンの著書のわずか1、2章がかろうじてふれているくらいか。」

本には、虫屋と屋台、虫籠を持つクニコさんらしき女が映った写真が掲載され、「虫売りの屋台毎全部買ってしまった」と説明が書かれてある。モニンを除き虫の種名は現在と変わらない。江戸の資料に比べ上方の資料は少なく、屋台の写真があるので当時の関西、特に大阪・神戸の屋台を知る貴重な手がかりになった。

上方の虫屋

江戸の虫屋の姿は資料や風俗画も多く、よく分かっている。上方の資料は少なく、古いところは見あたらない。長谷川貞信の「浪速風俗図絵」（1968）の絵はスミスさんの虫屋とよく似ている。流し売りの場合は、街角に立って節のある涼しい歌声を上げる。長田純は「町かどの芸能」（1984）で松虫売りの口上を紹介している。

「♪まつむしぃ　まつむしやいらんかなぁ　まつむしぃ　まつむしやいらんかなぁ」

「まつむしやいらんかな。まつむしを買うてやっとくれ。のんのんさん（お月さん）も近いことじゃでよ。すすきに団子、キキョウの花にもう一つ、松虫を一匹いれてやっとくれ。これでほんとに秋がそろうでよ。のんのんさんは一夜、二夜かぎりじゃが、松虫やもっと長うなぐさめてくれるでよ。」

そして時折、家の門口に立って奥へ呼びかける。

「まつむしやいらんかなぁ。ちっとも世話かけよらんでよー」

買ってもらったときはうれしそうに必ずひとことつけ加える。

「忘れんように、おしめりだけはたのむでな。人でも歌えば水がほしいでのう。」

年寄りの語り草になっている鈴を振るように美しい唄売り声だったと言う。

キリギリスだけを売る虫屋もあった。私が小学生4年生頃までは流しのキリギリス売りが北河内の住宅地を回っていた。麦茶売りの「む・ぎ・ちゃ、はったいこ～う」の売り声と共に記憶が鮮明である。キリギリス売りは季節的な、郊外農家などの副業的な商売だったかもしれない。

（P.5・6・7の執筆：加納康嗣／日本直翅類学会）

闘蟋（とうしつ）　ー中国（ちゅうごく）のコオロギ文化（ぶんか）ー

万葉集にコオロギを詠んだ歌が7首ある。日本の鳴く虫の記録としては最古のものであろう。日本の鳴く虫文化は鳴き声を楽しむのが目的で、江戸時代に華やかに花開き、興隆は昭和初期まで続いた。戦後は急速に衰退し、現在では鈴虫を飼って楽しむ風習と、昆虫館等で「鳴く虫観察会」が行われる程度に衰退している。

世界で鳴く虫文化を持つもう一つの国、中国では我が国とは違った発展を見せ、現在も続いている。中国での最も古い記録は今から1500年ぐらい前の詩経で、蟋蟀という言葉が現れる。鳴き声を楽しむ風習の歴史は長く、唐の玄宗の時世（開元・天宝年間）には宮廷でコオロギを飼って鳴き声を楽しむようになり、それが一般庶民にまで広まったという。しかし、中国の鳴く虫文化を最も特徴づけるのは、コオロギ相撲（闘蟋）である。このコオロギ文化は、中国固有の文化として独自に発展した。天宝年間には既に金持ち達の中で広まり、大金をかけるようになっていたが、起源は農民の農業儀礼から発展したという。農民達は豊作を祈願して、土に穴を掘り、その中でコオロギを闘わせた。闘いには1枚の餅が賭けられ、これが月餅の始まりだという。これは現在のコオロギ博士、中国科学院の呉継伝教授の説である。宋代には民間にも広まり、南宋の宰相賈似道はコオロギマニアのバイブルとも呼ばれる「促織経」を著した。唐以来の知識を集大成し、自分の研究成果を合わせて体系的にまとめた、世界始めてのコオロギの全書である。現物は残っていないが、後世いろいろのコオロギ本が発行されるが、どれもこの本を参考にし、大きく越えることはできないという。闘蟋は古典や文人の記録にも多く、最近の映画にも登場する。伝統文化として現在も盛んに行われている。

戦士はオスのツヅレサセコオロギである。形や色等で多くの品種に分類された。飼い主達は、コオロギをいかに強い戦士にしあげるか、食事法、入浴法、便秘や冷え性等病気治療法、減量やトレーニング法等、金と時間と知恵をつぎ込んだ。飼育容器など様々なグッズが開発されているが、自分の飼育信念や極意にあったものを選んだり自分で制作し、特産地情報をつかみ、勝つため、強いコオロギを得るため全知全霊を傾ける。賭博の手段としてだけではこれだけの伝統技法が継承され、また庶民的広がりも生まれないだろう。戦わせるワクワクする楽しさ、飼う楽しさがあってこそ連綿と今に伝えられたと言える。それが伝統文化であろう。

虫（むし）かご

昔の虫かごといえば、竹ひご製の虫かごをイメージするだろう。鳥籠に似せた虫かごは江戸寛政年間、本所亀井家の家来近藤という侍が作り始めたという記録がある。それ以前のはっきりした記録はなく、キリギリス籠のような粗末な荒いのが主流だったか、あるいは、紗の様な粗い目の布等で作られていたのであろうか。

地上性コオロギ類は物陰に潜まないと落ち着かなく、開放的な容器ならば齧って脱出する性格がある。彼らには壷などが最適の飼育器であった。一方キリギリス類やマツムシ・クサヒバリ等植物体に登り、草や葉の隙間に生活するコオロギ類は、桟の多い竹製の籠を草間と錯覚して落ち着き、逃げ出さない。このような虫の性格を見極めながら、形の変わったものが作られるようになる。扇型・船型・筒型、大きさはまちまちで切手大、猫足、漆塗りで蒔絵を施したもの、象牙やマホガニーなどを使った高級品等が作られるようになった。江戸で発展した虫かごはやがて全国に普及していく。明治以後であろうか、エンマコオロギ用には、桐箱で片面が金網のものが工夫されている。

中国では鳴き声観賞用に限ってもさらに変化にとんだ虫かごが作られた。日本よりも繁栄し、現在もなお盛んな鳴く虫文化の特徴は、素材と形、用途に見ることが出来る。コウリャン・柳条・ヨモギ茎・麻茎・ドロ・ヒョウタン・麦わら・竹ひご・竹筒・陶土などの素材を使って、素朴ではあるが変化にとんだ形のものが多い。

携帯用の容器が作られているのも大きな特徴である。北京など寒い北の地方の人々が思いついたものであろうか。コオロギ用に懐に入れて持ち運ぶための小さな壺もあるが、鳴き声を楽しむための携帯用具は、材質やデザインに凝ったものが多い。熱伝導が良い銅製や骨・角・マホガニー・竹筒・ヒョウタン等が使われている。映画「ラスト・エンペラー」の終盤で主人公がヒョウタン製の携帯容器を取り出す場面がある。出てきたのはマンシュウキリギリスだった。これを見ても携帯用容器が愛用されていたことが良くわかる。20年位前だが、上海を旅した人から、バスの中でキンヒバリの声がするのに驚いた。見回すと、運転手の脇に小さいプラスチック製の携帯容器が置いてあり、そこで鳴いていたと聴いたことがある。伝統ある中国鳴く虫文化の深さを実感したエピソードである。

闘蟋（とうしつ）　ー中国（ちゅうごく）のコオロギ文化（ぶんか）ー

万葉集にコオロギを詠んだ歌が7首ある。日本の鳴く虫の記録としては最古のものであろう。日本の鳴く虫文化は鳴き声を楽しむのが目的で、江戸時代に華やかに花開き、興隆は昭和初期まで続いた。戦後は急速に衰退し、現在では鈴虫を飼って楽しむ風習と、昆虫館等で「鳴く虫観察会」が行われる程度に衰退している。

世界で鳴く虫文化を持つもう一つの国、中国では我が国とは違った発展を見せ、現在も続いている。中国での最も古い記録は今から1500年ぐらい前の詩経で、蟋蟀という言葉が現れる。鳴き声を楽しむ風習の歴史は長く、唐の玄宗の時世（開元・天宝年間）には宮廷でコオロギを飼って鳴き声を楽しむようになり、それが一般庶民にまで広まったという。しかし、中国の鳴く虫文化を最も特徴づけるのは、コオロギ相撲（闘蟋）である。このコオロギ文化は、中国固有の文化として独自に発展した。天宝年間には既に金持ち達の中で広まり、大金をかけるようになっていたが、起源は農民の農業儀礼から発展したという。農民達は豊作を祈願して、土に穴を掘り、その中でコオロギを闘わせた。闘いには1枚の餅が賭けられ、これが月餅の始まりだという。これは現在のコオロギ博士、中国科学院の呉継伝教授の説である。宋代には民間にも広まり、南宋の宰相賈似道はコオロギマニアのバイブルとも呼ばれる「促織経」を著した。唐以来の知識を集大成し、自分の研究成果を合わせて体系的にまとめた、世界始めてのコオロギの全書である。現物は残っていないが、後世いろいろのコオロギ本が発行されるが、どれもこの本を参考にし、大きく越えることはできないという。闘蟋は古典や文人の記録にも多く、最近の映画にも登場する。伝統文化として現在も盛んに行われている。

戦士はオスのツヅレサセコオロギである。形や色等で多くの品種に分類された。飼い主達は、コオロギをいかに強い戦士にしあげるか、食事法、入浴法、便秘や冷え性等病気治療法、減量やトレーニング法等、金と時間と知恵をつぎ込んだ。飼育容器など様々なグッズが開発されているが、自分の飼育信念や極意にあったものを選んだり自分で制作し、特産地情報をつかみ、勝つため、強いコオロギを得るため全知全霊を傾ける。賭博の手段としてだけではこれだけの伝統技法が継承され、また庶民的広がりも生まれないだろう。戦わせるワクワクする楽しさ、飼う楽しさがあってこそ連綿と今に伝えられたと言える。それが伝統文化であろう。

虫（むし）かご

昔の虫かごといえば、竹ひご製の虫かごをイメージするだろう。鳥籠に似せた虫かごは江戸寛政年間、本所亀井家の家来近藤という侍が作り始めたという記録がある。それ以前のはっきりした記録はなく、キリギリス籠のような粗末な荒いのが主流だったか、あるいは、紗の様な粗い目の布等で作られていたのであろうか。

地上性コオロギ類は物陰に潜まないと落ち着かなく、開放的な容器ならば齧って脱出する性格がある。彼らには壷などが最適の飼育器であった。一方キリギリス類やマツムシ・クサヒバリ等植物体に登り、草や葉の隙間に生活するコオロギ類は、桟の多い竹製の籠を草間と錯覚して落ち着き、逃げ出さない。このような虫の性格を見極めながら、形の変わったものが作られるようになる。扇型・船型・筒型、大きさはまちまちで切手大、猫足、漆塗りで蒔絵を施したもの、象牙やマホガニーなどを使った高級品等が作られるようになった。江戸で発展した虫かごはやがて全国に普及していく。明治以後であろうか、エンマコオロギ用には、桐箱で片面が金網のものが工夫されている。

中国では鳴き声観賞用に限ってもさらに変化にとんだ虫かごが作られた。日本よりも繁栄し、現在もなお盛んな鳴く虫文化の特徴は、素材と形、用途に見ることが出来る。コウリャン・柳条・ヨモギ茎・麻茎・ドロ・ヒョウタン・麦わら・竹ひご・竹筒・陶土などの素材を使って、素朴ではあるが変化にとんだ形のものが多い。

携帯用の容器が作られているのも大きな特徴である。北京など寒い北の地方の人々が思いついたものであろうか。コオロギ用に懐に入れて持ち運ぶための小さな壺もあるが、鳴き声を楽しむための携帯用具は、材質やデザインに凝ったものが多い。熱伝導が良い銅製や骨・角・マホガニー・竹筒・ヒョウタン等が使われている。映画「ラスト・エンペラー」の終盤で主人公がヒョウタン製の携帯容器を取り出す場面がある。出てきたのはマンシュウキリギリスだった。これを見ても携帯用容器が愛用されていたことが良くわかる。20年位前だが、上海を旅した人から、バスの中でキンヒバリの声がするのに驚いた。見回すと、運転手の脇に小さいプラスチック製の携帯容器が置いてあり、そこで鳴いていたと聴いたことがある。伝統ある中国鳴く虫文化の深さを実感したエピソードである。

いんふぉめいしょん

第18回特別展
開催中 『バッタ・コオロギ・キリギリス』
～バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑刊行記念～

期間：2007年8月1日(水)～10月21日(日)
会場：橿原市昆虫館　二階展示室
期間：橿原市昆虫館、日本直翅類学会
協力：大阪市立自然史博物館、NPOやまと自然と虫の会、
　　橿原市昆虫館友の会
後援：北海道大学出版会

特別展関連行事・むしムシぜみな～る
8月 『バッタ・コオロギ・キリギリス』

講師：加納康嗣氏　(日本直翅類学会長)
日時：8月19日(日)　午後1時30分～3時30分
場所：橿原市昆虫館 会議室集合
内容：鳴く虫のお話と昆虫のクラフト体験
対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員：50名(定員になり次第締め切ります)
参加費：無料(観覧料が必要です)
持物：筆記用具など
申込：8月6日(月)午前10時より電話受付　先着順

9月 秋の虫観察会 雨天中止

日時：9月8日(土)　午後5時～9時ごろ
場所：橿原市昆虫館会議室集合～万葉の森(徒歩)
内容：野外でホンモノの鳴く虫を観察します。
対象：小学生以上で、親子又は家族単位
定員：50名(応募多数の場合は抽選)
参加費：無料
持物：弁当・水筒・タオル・筆記用具・虫よけ等
　　(長ズボン・運動靴等、野外観察しやすい服装で)
申込：往復葉書に、行事名・参加者の氏名・学年・住所・
　　電話番号を明記し、8月25日(土・必着)で昆虫館
　　へお申込下さい。

9月 第3回ハチ・アリ講座「スズメバチの巣を観察しよう!」

日時：9月22日(土)　午後1時30分～3時頃
会場：橿原市昆虫館　会議室集合
内容：採集したスズメバチの巣を観察、内部の巣部屋、卵、
　　幼虫、さなぎを観察します。
参加資格：小学生以上
定員：15名(要申込)

特別展関連行事・観察教室
10月 『バッタ・コオロギ・キリギリス』

日時：10月14日(日)　午後1時30分～3時30分
場所：橿原市昆虫館　会議室集合
内容：鳴く虫の観察やイナゴの試食
対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員：35名(応募多数の場合は抽選)
参加費：無料(観覧料が必要です)
持物：タオル・筆記用具など(活動しやすい服装)
申込：往復葉書に、行事名、参加者の氏名・学年・住所・
　　電話番号を明記し、10月1日(月・必着)までに昆虫
　　館へ。インターネットでも申込出来ます。

夏休み・きんき昆虫館3館連携企画
開催中 3つの昆虫館シールラリー 『2007 ムシっと関西』

期間：9月2日(日)まで
開催館：橿原市昆虫館(奈良)・箕面公園昆虫館(大阪)・
　　伊丹市昆虫館(兵庫)
対象：3歳以上 (入館1回につき、一人一枚です)
ルール：箕面・橿原・伊丹、三つの昆虫館に入館し、シー
　　ルシートに昆虫シールを集める3種のシールが揃っ
　　たら、3館目の昆虫館にてオリジナルバッジ(非売品)
　　をもれなくプレゼント!

開催中 ふれあいルーム 昆虫とふれあおう!

日程：11月25日(日)までの土・日曜、祝日
　　午前10時～午後4時に実施
場所：橿原市昆虫館 二階展示室 一角
内容：昆虫館で飼育している昆虫とふれあい、博物館実
　　習生と一緒に、生きた昆虫を観察します。

※いずれも詳しくは、橿原市昆虫館（TEL　0744－24－7246）までお尋ね下さい。

橿原市昆虫館だより　GONTA	Vol.17 No.3

2007年(平成19年)8月20日発行　(通巻67号)
編集・発行／橿原市昆虫館

〒634-0024
奈良県橿原市南山町624番地
tel.0744－24－7246
fax.0744－24－9128
http://www.city.kashihara.nara.jp/insect/

印刷・製本／株式会社アイプリコム

1段目・左から右へ　クビキリギリス→モリオカメコオロギ→ヤブキリ→ヒロバネヒナバッタ→クサキリ
2段目・左から右へ　セグロイナゴ→タイワンクツワムシ→マダラスズ→ハヤシウマ→コガタコオロギ
3段目・左から右へ　クロツヤコオロギ→ツマグロバッタ→タイワンエンマコオロギ→ヒメギス→ハネナガイナゴ
4段目・左から右へ　カヤキリ→キンキクチキウマ→トノサマバッタ→キリギリス→エンマコオロギ